

盆踊り漫遊

竹中尚文

第5回

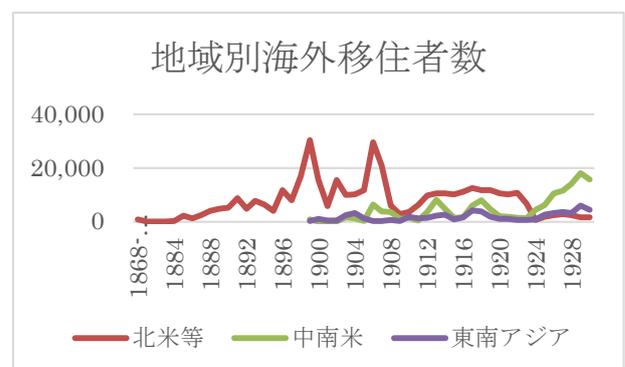
4. 排日のはじまり

前回は、「サンフランシスコ日本人学童差別事件」をきっかけとして「日米紳士協定」がむすばれて、「写真花嫁」の時代に入りました。「写真花嫁」は、当時のアメリカでの日本人の社会が、出稼ぎの一時的滞在の意識から家族を持って定住するという意識への変化を意味していました。日本人が腰を据えてここで暮らしていこうと思った頃、アメリカの社会は出て行けと悪い始めます。今回は、アメリカにおける排日についてお話したいと思います。アメリカにおいて、排日の歴史は前半と後半に分けられると思います。前半は1924年の排日移民法までで、後半は第2次世界大戦終結までと思います。

1885年に日本政府が移民を解禁してから1906年に「サンフランシスコ日本人学童差別事件」が起きるまでの約20年間、アメリカ本土やハワイに渡る日本人は増

え続けました。一方で、1880年代はアメリカ社会が中国人移民を閉め出し始めた頃です。中国人はそれ以前からアメリカに渡り、大陸横断鉄道建設に大きな役割を果たした労働者です。大陸横断鉄道が完成して(1869年)、労働力に余剰ができると不要な存在となりました。1870年に成立した帰化移民法によってアジア人を「帰化不能外国人」とするようになりました。

とくに1900年頃には、日本人が急増した印象があったようです。それはグラフでも明らかですが、日本国内の



日清戦争(1894-95)と日露戦争(1904-05)の影響も大きかったと思います。くわ

えて、1899年にアメリカ合衆国によるハワイ併合がありました。当時、日本からハワイに移り住んだ人はとても多く、またその労働環境は過酷を極めたといえます。ハワイで最も過酷に扱われた日本人労働者は、ハワイ併合によってアメリカ本土に渡る人が多かったようです。

1900年代に入り、中国人の流入も一段落する一方で中国外交官の努力もあって中国人排斥運動が止まりました。その頃に日本人が増加して、アメリカの人たちの矛先は日本人に向き始めました。日本人排斥の始まりの象徴的な出来事が「サンフランシスコ日本人学童差別事件」(1906年)でした。この事件については、前回にお話をしましたが、アメリカにおいての排日運動の始まりともいわれる出来事でした。

その前年にあったサンフランシスコ大地震に対して日本政府が拠出した義援金の額は、他の国々の支援額の合計を上回るものでした。サンフランシスコ市は、地震の最も被害の大きかった地域の学校に日本人児童を集めようとしたのでした。地震の被害が大きかったので、治安の悪いところでした。このサンフランシスコ市の決定に、当地の日系人のみならず日本の国内でも一斉に反発の声があがりました。そして

それは日米両国の外交問題となり、「日米紳士協定」という決着にいたるのです。

排日の次の段階は、1913年にカリフォルニア州が外国人土地法を成立させます。これは外国人の土地賃借及び所有を禁ずる法律でした。法律提案者のウェブは提案理由を「日本人をカリフォルニアから追い払うことを目的としている」と述べました。先に中国人を対象に成立した帰化移民法(1870年)で、アジア人は「帰化不能外国人」と扱われていました。したがって日本人はこの土地法によって、農地を所有できなくなりました。一方で、この頃になると多くの日本人は結婚をして家庭を持つようになっていました。ここで生まれた子供たちは、アメリカ生まれだからアメリカ国籍を有することになります。土地を二世名義にすることで、この法律に対抗したのでした。

こうした日系人の動きに対して、1920年に外国人土地法修正法を成立させて、外国人及び未成年者の土地所有を禁じました。この立法によって、日系人の土地は急速に減少していきます。

1922年には、小沢孝雄氏にアメリカ連邦最高裁判決が下ります。小沢孝雄氏というのは、アメリカの帰化移民法に挑戦した

代表的な人でした。カリフォルニア大学バークレー校を卒業し、敬虔なキリスト教徒である彼は、自分こそが帰化にふさわしい人物であるとして、帰化を訴えました。小沢氏の帰化申請に対して、1870年の帰化移民法が適用されるべきであるとして帰化申請を却下しています。この帰化移民法は、アメリカの国籍を有する権利は建国の白人にあって、アフリカ系の民族とアメリカ先住民族にも付随して認められるだけでした。アジア人はどんな人物であれ、帰化は認められなかったのです。

さらに、1924年には排日移民法が成立しました。これ以後、日本人はアメリカに移り住むことはできなくなりました。この法案の成立については、当時の日本の駐米大使が法案の成立に対して「重大なる結果」を招くと述べました。このことが、アメリカ連邦議会は脅しと捕らえて、法案の可決を早めたともいわれているようです。脅しであったかどうかに関わらず、巧みな外交とはいえません。一方で、アメリカの排日運動の根底には、人種差別の意識があったと受け止められるものでした。政治学者の簗原俊洋氏は「排日運動と排日移民法はアメリカの道徳的影響力を大いに失墜させ、白人本位の世界システムでは日本の存亡

が脅かされるといった危機感を当時の多くの日本人に抱かせたという事実である。そうした潜在的意識が、その後の日本を国際協調主義体制から徐々に離脱する方向へ導いた」（『朝日選書 アメリカの排日運動と日米関係』2016年）と指摘されています。

1906年から1924年までの排日運動は、アメリカ人の人種差別意識が強く表現された運動でした。一方で、日本では大正時代にあたり、国内にも民主主義を求める人々が登場してきます。この人たちにとって目標とするのがアメリカでした。ところが、排日というアメリカ人の否定的感情によって、日本人の嫌米意識が強くなりました。双方の否定的な感情が外交に影響し、冷静な展望を持つことができずに太平洋戦争の一因にもなったようです。この歴史を現代の韓国と日本の相互の政治家と国民は学ぶ必要があるように思います。また、二国間の国際関係の悪化を最も恐れるのは、その間で暮らす人々です。

ところで、なぜアメリカ人が1900年頃から日系人に対してこのような悪感情を表現する行為を繰り返すようになったのでしょうか。

私は、数年前にカリフォルニアから我が

家を訪れた人にイチゴを勧めたことがあります。その人は、イチゴを口にしたいくはなかったようですが無理に勧めました。予想外の美味しさだったようです。イチゴだけではありません。今、日本で栽培される柑橘類、トマト、リンゴなどはアメリカの人を驚かせるものです。かつて、アメリカからオレンジを輸入することが決まったとき、日本のミカン農家は消滅するだろうといわれた時代がありました。日本の農家は美味しい野菜や果物を作ることに卓越した能力があると思います。

19世紀のカリフォルニアの農業は、牧場が中心であったそうです。20世紀に入る頃から野菜や果樹が栽培されるようになり、今では全米の野菜や果樹の供給地の一つとなっています。19世紀末からアメリカに渡った日本人は、英語が得意なので渡った人ではありません。多くが農家の出身者でした。毛布一枚を持って移動する農業労働者として働き始めました。働いてお金を少しずつ貯めて、わずかな土地を取得するところから始めたのです。わずかな土地で牧場をすることはできません。自分たちの得意な農業をしたのです。小さな土地に手をたくさん入れる、労働集約型の農業です。そこで作られる作物は野菜や果物が

多かったのです。こうした農業は気候条件にも適したのでしょう、日系人の農場は増え続けました。

20世紀初頭の約20年間の日本人排斥運動の中心になったのは、白人の労働者と農民です。サンフランシスコ日本人学童差別事件の時、サンフランシスコ市を動かしたのは労働組合でした。日本人がやって来て、低賃金で働く多くの日本人が故郷に送金していることに対しての憤りがありました。排日運動は白人農民に広がりました。少しずつ農地が日本人のものになっていくことへの危機感があったのでしょうか。牧場のような農業から果樹野菜のような労働集約農業への変化でした。今日のカリフォルニアの農業を考えれば、転換期であったのでしょうか。しかし、農業の変化を受け入れて共に繁栄していく道を探らなかったのは残念なことです。それは、現代のアメリカでも壁を作って変化を望まない社会を守ることが、新たなる未来を開くとは思えません。

この時代背景の中で、仏教はどうしていたのでしょうか。日系キリスト教会と日系仏教寺院が存在していました。キリスト教と仏教の比較をここで論ずることはできませんが、社会との関わり方には相違があり

ます。キリスト教はいかに現世を生きるのか、神の御心に従って生きるのか、ということが大切です。従って、現実の社会への関わりは積極的といえるでしょう。フィリピンのマルコス政権から民主政府への移行や南アフリカのアパルトヘイト撤廃でキリスト教会の役割は絶大なものでした。これに対して、仏教は成仏が中心となるので死をいかに認識し、そこから生を捉えるという性質から政治社会への関与が比較的少ないのかも知れません。いずれにしても、宗教がいかに人々の心に寄り添えるかということが、その宗教の社会的存在であるといえるでしょう。そう考えれば、第2次世界大戦後に日系仏教が残っているのは、この排日の時代にその一因が潜んでいるように思います。

日本仏教がアメリカ合衆国本土に渡ったのはおよそこの排日の時代でありました。(ハワイに渡ったのはもう少し前になりますが、私は詳しく調べられませんでした。)

浄土真宗本願寺派(お西)	1899年
真宗大谷派(お東)	1904年
真言宗	1911年
日蓮宗	1914年
曹洞宗	1922年

浄土宗 1928年
各宗派ともそれほど大きく差はないようにみえますが、浄土真宗本願寺派だけが突出した展開を見せます。

前々回に述べましたように、本願寺は二人の僧侶をサンフランシスコに派遣して、アメリカでの浄土真宗本願寺派の組織づくりを始めたのが1899年でした。1899年にはフレズノに法話会を組織してお寺が作られ始めます。同じく1899年にサクラメントで仏教青年会が組織されました。1900年にはやはりフレズノに仏教青年会が作られました。1901年にはシアトルで、1902年にはサンノゼで、1903年にはオークランドで仏教青年会が作られました。1909年には西海岸の20カ所でお寺が既に存在したというのです。浄土真宗のお寺がとてつもないスピードで増えていったのです。どれも日本人が暮らす地域でした。

寺院建立というイメージではありません。宗教組織なり、宗教者の思いで寺院を作るのではなく、そこに暮らす人々が自分たちの集まれる家なり小屋なりを建てたのがお寺になったと思います。こうした寺院建立は、浄土真宗の本来の姿です。浄土真宗のほとんどのお寺は、有力者の一念発

起で寄進を受けて建ったものではありません。普通に暮らす人々が力を合わせて粗末な建物を建てたところが始まりでした。

当時の様子を伝え聞くところによれば、日系人の半数が日系キリスト教会のメンバーであり、半数が浄土真宗のお寺のメンバーだったそうです。異国の地で就職の機会を考えてもキリスト教徒が有利です。現地の日本政府の出先機関も「郷に入っては郷に従え」という感じだったそうです。前回に申し上げた「写真花嫁」のアメリカ入国の時も、領事館はキリスト教宗教者だけを準備したことに不満がでて、浄土真宗の僧侶を呼んできました。また、当時の日本政府は日本語学校を勧めませんでした。アメリカで暮らすのですから日本語よりも英語を教えるように勧めました。日本語学校というと浄土真宗のお寺というイメージですが、当時は日系キリスト教会でも日本語学校がありました。

当時の一世代日本人は英語が不得意な人がたくさんいました。二世はアメリカで生まれて、アメリカで学校に行きます。二世にとっては英語が普通の言語になります。そうすると、一世は子供を日本語学校に入れて、日本語を話せるようにしたのです。

今ではほとんど亡くなってしまった二世の人たちが、家に帰ると英語禁止の家庭がほとんどだったと話してくれました。

第2回のところでも申しましたが、当時の浄土真宗のお寺は日本語を教える必要性を認識し、積極的に日本語学校を運営していました。こうした行為は、反日運動の中で「ミカドの精神」を教えていると批判されました。お寺は、日本のナショナリズムの拠点のように受け止められていました。一方、日本では浄土真宗は他の宗派に比べてナショナリズムから遠い立場でした。

日本の政府からもアメリカ社会からも決して勧められはしないけれど、日系の人たちには浄土真宗のお寺は必要な存在がありました。守屋友江氏の指摘によれば、1930年代に相当数の日系二世の若者を日本に留学させて開教使を養成したそうです。（開教使：浄土真宗本願寺派では、海外で布教を中心とした活動をする僧侶をこのように呼びます。）このことは、当時の日系人社会が浄土真宗を不可欠なものとしていた証左といえるでしょう。

日系移民の歴史年表

アメリカでの出来事	西暦	和暦	日本での出来事
	1868	明治元年	
帰化移民法	1870	明 2	
	1877	明 10	西南戦争
	1885	明 18	移民解禁
	1894-95	明 27-28	日清戦争
ハワイ併合 本願寺による北米開教の開始	1899	明 32	
	1904-05	明 37-38	日露戦争
サンフランシスコ日本人学童差別事件	1906	明 39	
日米紳士協定	1907-8	明 40-41	
写真花嫁			
カリフォルニア州外国人土地法	1913	大 2	
	1914-18	大 3-6	第1次世界大戦
外国人土地法修正法	1920	大 9	
	1923	大 12	関東大震災
排日移民法	1924	大 13	
北米で初めての盆踊り(サンフランシスコ)	1931	昭 6	